

◆民族のこころ(148)◆

インドのカンナダ語映画

太田 信宏

インドは映画大国であり、毎年膨大な数の映画がインドで制作されている。撮影スタジオが集まり映画関係者も多く暮らすボンベイ（現在はムンバイ）で主に作られる娯楽映画は、ハリウッドにかけて「ボリウッド映画」として世界的に有名である。一方、



上映終了後の映画館前の雑踏

インドは多言語の国家である。最大の話者人口を誇り、国の公用語に定められているヒンディー語のほかにも、ベンガル語やテルグ語、タミル語といった話者人口が数千万規模の地域言語が数多く見られる。娯楽映画の多くはヒンディー語だが、地域言語による映画も少くない。例えば、数年前に日本でヒットした『ムトゥ 踊るマハラジャ』は、タミル語の映画であった。

筆者が90年代前半に2年間留学した南インド・カルナータカ州でも、住民の大多数の母語であるカンナダ語による映画が数多く制作されている。筆者も留学中はカンナダ語の聴き取り練習のつもりで、相当数のカンナダ娯楽映画を観た。しかし、それらの娯楽としての「質」は、残念ながらかなり鼠目に見ても、ヒンディー映画はもとより同じ南インドの地域言語であるタミル語やテルグ語のものより「劣る」ものが多かった。これは勿論筆者の個人的感想であるが、当時、現地の知り合い（多くは大学関係者）に、カンナダ映画をよく観ていると言うと、「面白くないから私はほとんど観ない」といった反応がしばしばあった。こうした反応は、ストーリーが荒唐無稽なうえに、本筋とほとんど関係ない歌と踊りがいくつも途中で割り込むインド娯楽映画全般に批判的というよりは無関心な人たちに当然多く見られた。しかし一方で、同じ娯楽映画でもカンナダ語のものはほとんど観ないがヒンディー語のものはよく観るといふ人々もいて、「ヒンディー映画の方が面白いからそちらを観たら」と「助言」されることもあった。

実際、近年のカルナータカ州ではカンナダ語以外の映画を上映する映画館が増加し、カンナダ映画産業の斜陽が指摘されている。国の公用語であるヒンディー語や、国際化時代の世界共通語となりつつある英語が、教育や言論の場で重要性を増していく。こうした現状に危機感を抱き、カンナダ語の保護を声高に叫ぶ一部の政治家・文化人の中には、州政府にカンナダ映画振興策を求めるだけでなく、州内での非カンナダ映画の上映を制限しようとする動きも見られる。これは裏を返せば、それほどカンナダ映画が危機的状況にあるということなのであろう。

一方、近年、急速な経済成長を背景に、仕事や教育を理由に欧米などの海外で暮らすインド人が増えている。IT産業の中心地で「インドのシリコンヴァレー」とも呼ばれるバンガロールを州都とするカルナータカ州からも多くの人々が海外に渡航している。日本でも相当数のカルナータカ州出身のカンナダ語話者が首都圏を中心に暮らすようになった。そんな彼らの親睦会にたまたま出席したときに印象に残ったのが、カンナダ映画の中の歌のしりとり合戦やカンナダ映画に関するクイズ大会に興じる姿であった。地元カルナータカ州ではヒンディー映画などにおされて必ずしも人気があるとは言えないカンナダ映画であるが、遠い異国に暮らすカンナダ語話者にとっては、その内容の如何を問わず母語の映画として特別の意味を持っているのかもしれない。